英米文化専攻の特色と研究指導・授業科目

1　本専攻の特色

英米文化専攻は英語学、英米文学、英米文化の三分野から構成され、英語、英米の文学、文化を中心とする研究を通して学際的な教養を修得し、大学、高等学校、中学校教員をはじめ、さまざまな分野で活躍できる人材の育成を目標としています。

英語学の授業では、英語に関する研究、演習を行います。英語の意味と形式、語、文、談話、コミュニケーションという観点から、さらに必要に応じて日本語との比較をしながら、英語のしくみを考察します。また外国語としての英語を学ぶ・教えるという視点から、英語教育学を研究する授業もあります。英語学、英語教育学ともに、文献の精読とデータ分析を通して、問題を深く追究していきます。

文学の授業では、英米の詩、小説、演劇、批評に関する研究、演習を行っています。特定の国の特定の文化環境の中で生み出されてきた「文学」ということばの贈りものが、個人を越え、時代を超えて、世界の人々に送られつづけている事実を、少しでも親しく、こまやかに感受できることを目指します。

文化の授業では、具体的な作品や史実、思想、伝統、広義の制度や価値観といった文化的事象それ自体の研究はもとより、研究をするうえでの姿勢と方法も学びます。たとえば、歴史に対して真摯に向き合い、また隣接する他の事象にも積極的に目配りをするという態度を養い、一方で分析、考察のための視座や理論を身に付けます。

修士課程での最大の研究活動は修士論文の執筆といえます。本専攻では、大学院生がひとりの研究者としてそれぞれの関心事に沿った十分な研究が遂行できるよう、複数の教員による指導体制をとり、手厚い論文指導を行います。

なお、大学院生の研究成果の発表の場として、群馬県立女子大学英米文化学会の大会や研究誌があり、積極的に活用されています。さらに、学外での研究発表に対しては、本学会からの支援もあり、利用が期待されています。

受験生へのメッセージ

わたしたちの研究は、特定の視点を通してはじめて見えてくる世界を対象にしています。ですから、その世界に近づくためには、研究者が各々固有の問題意識を持っていなければなりません。個人個人の問題意識は英語研究、文学研究、文化研究のなかに独自の場所を見いだす出発点であると同時に、既存の研究に疑問を投げかけるよりどころとなるでしょう。大学院での研究活動は、このように、最初は個人的とも言える小さな関心を次々に連鎖させ、同じ問題を扱った先行研究を検討し、次第に大きく展開してゆく過程です。外国語の文献を読みこなす語学力、どこまでも対象を追ってゆく粘り強い資質、そして果敢な批判精神が必須です。熱い探究心を期待しています。

2　指導教員及び授業科目

□　指導教員

清水　啓子
飯村　英樹
松﨑　慎也
島田　協子
小林　徹
笠井　俊和
木下　耕介

□　授業科目

英語学研究 4	英語教育研究の論点と手法を学ぶ	(飯村准教授)
英語学演習 3	英語教育研究における基礎概念を理解する	(飯村准教授)
英語学演習 4	英語教育研究の論点と手法を学ぶ	(飯村准教授)
英語学研究 5	認知意味論・認知文法のアプローチから英語を分析する	(清水(啓)教授)
英語学演習 5	認知言語学の入門書を読み、英語や言語一般について考える	(清水(啓)教授)
英語学演習 6	語彙や構文の意味について、特にその多義性について考える	(清水(啓)教授)
英語学研究 1	英語エッセイライティングから論文作成基礎までを学ぶ	(原島講師)
英語学演習 2	ICTを利用した英語の学習と教育の様々な方法を実践的に学ぶ	(原島講師)
英語学研究 2	認知文法の観点から英語と日本語を分析する	(中村講師)
英米文学研究 1	英詩の鑑賞法を学ぶ	(松﨑教授)
英米文学演習 1	文学作品の精読、鑑賞結果の発表を行う	(松﨑教授)
英米文学演習 2	英詩の鑑賞法を学ぶ	(松﨑教授)
英米文学研究 2	英米文学作品の分析と批評の方法を学ぶ	(島田准教授)
英米文学演習 3	英米文学作品の読解と研究の方法を学ぶ	(島田准教授)
英米文学演習 4	歴史的文脈の中での英米文学研究の方法を学ぶ	(島田准教授)
英米文化研究 1	批評理論を読む	(小林(徹)教授)
英米文化演習 1	論文作成のための実質的な準備を行う	(小林(徹)教授)
英米文化演習 2	批評理論を読む	(小林(徹)教授)
英米文化研究 2	邦語文献を批判し、論理的思考を磨く	(笠井准教授)
英米文化演習 3	論文の作成に向けてアメリカ文化の諸相を学ぶ	(笠井准教授)
英米文化演習 4	英語文献を批判し、論理的思考を磨く	(笠井准教授)
英米文化研究 4	テクストを精読し、今日の映像文化を歴史的に考察する	(木下准教授)
英米文化演習 7	映像の形式及び内容についての分析の方法論を学ぶ	(木下准教授)
英米文化演習 8	今日の映像文化についての理論的視座を得る	(木下准教授)
英語表現演習 1	英語による学術論文作成の基本を会得する	(未定)
英語表現演習 2	個別に指導を受け、実際の英語論文作成を行う	(未定)
英語特別演習 1	教員採用試験に備えて、英語の構文と語彙への理解を深める	(清水(啓)教授)
基礎研究	研究分野における基礎的知識と研究方法を修得する	(専任教員)
個別研究指導	個別に指導を受け、各自の研究課題に取り組む	(専任教員)

3　専任教員の研究分野

教　授　　清水　啓子　　［英語学］

専門分野及び研究紹介

英語ではなぜこういう言い方をするのだろうかという問いに対して、認知意味論・認知文法のアプローチから答えを探そうとしています。また言語の変化や多義性に関心があり、語彙・形態素・構文の多義構造、文法化現象を研究しています。目下のところ、英語の進行形構文に関心を持ち、その機能の多様性を考察しています。

著書・論文等

「英語進行形構文の命令的用法－認知言語学的考察－」（JELS 第33巻、2016年）、「間主観性、および行為と意図のメトニミー関係からみた行為解説の進行形」（『日本認知言語学会論文集』第14巻、2014年）、「英語結果構文の結果述語に関する一制約」（『日本認知言語学論文集』第5巻、 2005年）

准教授　　飯村　英樹　　［英語教育］

専門分野及び研究紹介

学習者の能力を正しくとらえるための英語テストの作成法と評価法に関する研究を続けています。また英語力を高める授業デザイン、指導法、活動、タスクについて理論的背景をもとに検討しています。

著書・論文等

『実例でわかる英語テストガイド』（小泉利恵・印南洋・深澤真（編著）大修館書店、2017年）、Are the least frequently chosen distractors the least attractive?: The case of a four-option picture-description listening test（日本言語テスト学会、JLTA Journal、19号、2016年）、「模倣音読」活動が音読技能およびスピーキング力を与える影響（全国英語教育学会、 飯村英樹＆髙波幸代 ARELE、27号、2016年）

教　授　　松﨑　慎也　［イギリス文学］

専門分野及び研究紹介

イギリス・ロマン主義文学の研究をしています。これまで、キーツ、ブレイク、ワーズワースといった詩人を対象に研究し、論文を執筆しています。関心のある問題は、作品の中の、思考過程、視点、イメージ、アイロニー、文化的表象、それと作家の、自然観、世界観、宗教観、そして複合芸術のあり方などです。

著書・論文等

「徒歩と詩作―ワーズワスの1790年大陸徒歩旅行の意義―」（『群馬県立女子大学紀要』第34号、2013年）、「キーツのギリシア」（長尾輝彦編著『文学研究は何のため――英米文学試論集』北海道大学出版会、2008年）、“The Structural Relation between Word and Picture in Blake's *Songs of Innocence and of Experience*”（『北海道英語英文学』第49号、2004年）

准教授　　島田　協子　［イギリス文学］

専門分野及び研究紹介

19世紀末から20世紀初頭にかけての、言語表現のあり方に関心があります。これまで、モダニズム文学の成立と発展を、主にT.S.Eliotを中心として研究してきました。「語り」の持つメカニズムに着目しながら、詩と散文との違いや、作家を取り巻く文化的コンテクストとの関連性も含めて「言葉で何かを表現するとはどういうことなのか」を考えています。

著書・論文等

「W.H. オーデン『夜行郵便』における詩作とテクノロジー」（『群馬県立女子大学紀要』第39号、2018年）、“The Indeterminacy of Pronouns in ‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’”（『群馬県立女子大学紀要』第33号、2012年）、「イギリスで語るために－大衆文化と『伝統』」（高柳俊一他編『モダンにしてアンチモダン－T.S.エリオットの肖像』研究社、2010年）

教　授　　小林　徹　［イギリス文化］

専門分野及び研究紹介

理論を仲立ちにして、作品と文化のあいだを縦横に往還することから浮かび上がってくる事柄について興味があります。なおここでいう理論とは、さらなる思考を促す多種多様な言説のことであり、作品とは、主にイギリスにおける文学作品、また映画を、それから文化とは、イギリスを中心とした広く西欧におけるそれを指しています。そしてこうした研究態度のもとにこれまで、イギリスロマン主義文学を主たる対象として、西欧における自己をめぐる諸問題について、また、たとえば小説の映画化といったメディア変換の時点で生ずる様々な力学のありようについて考察を行ってきました。

著書・論文等

"'Spirits,' 'the Infant Babe,' and 'the Spots of Time': The Mode of Autobiography in Wordsworth's The Two-Part *Prelude* (1799)"（『ＩＶＹ』第29巻、1996年）、「機械が造るモンスター―『フランケンシュタイン』、映画、そして1930年代初頭―」（『ＩＶＹ』第36巻、2003年）、"Maria's Narrative Goes Far: Mary Wollstonecraft's *The Wrongs of Woman: or, Maria. A Fragment* and a Possible Usage of the Autobiographical Mode"（*Ivy Never Sere* 音羽書房鶴見書店、2009年）

准教授　　笠井　俊和　　［アメリカ文化］

専門分野及び研究紹介

17・18世紀のアメリカの社会史を研究しています。特に船乗りと貿易に関心があり、輸出入された商品に関する数量的な貿易研究ではなく、その貿易を担った船乗りの人間像や役割について考察してきました。情報網が発展途上だった当時において、貿易のために船で各地を移動する船乗りは、陸に住む民衆よりもいち早く様々な情報を入手していたことから、情報伝達媒体としての船乗りの価値にも注目しています。

著書・論文等

『船乗りがつなぐ大西洋世界－英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房、2017年）、「船乗りと航海譚－英領アメリカ植民地における貿易と情報伝達」（田中きく代ほか編『海のリテラシー－北大西洋海域の「海民」の世界史』創元社、2016年）、「アメリカ史を学ぶためのウェブサイト・文献案内」（和田光弘編『大学で学ぶアメリカ史』ミネルヴァ書房、2014年）

准教授　　木下　耕介　　［映像文化］

専門分野及び研究紹介

アメリカ映画と北米の映画理論を参照しながら、映画の物語と登場人物について、またそれに対する我々観客の反応について思考を重ねています。映画という媒体にとって、現在の最大の関心事のひとつは、その様々な可能性にもかかわらず、視聴覚の経路によって時間と空間とを構築しながら、その中での登場人物の行動と反応とを描出することにあるようにみえます。ではその登場人物とはいかなる存在物か、それは我々人間自身の理解とどのような係わり合いをもつのか。それが思考の中心にある疑問です。

著書・論文等

「『参加者』の理論構築に向けて―― プロテウス効果の演劇・映画研究への応用可能性についての試論 ――」（『演劇学論集』第70号、2020年）、「表象の複層性とマルチモジュール処理－領域横断的登場人物研究に向けて－」（『群馬県立女子大学紀要』第40号、2019年）、「スクリーン上の仮想世界－『トロン』から『アバター』まで－」（『JunCture　超域的日本文化研究』03号、2012年）、"Focalization and Point of View in the Cinema" (Iconics Vol.9、2008)